

ヨハネによる福音書 6:24-35

聖書を（旧約と新約を）前後に読み続ける。

旧約に戻ってヘブライ人の輪とシンボル、そしてユダヤ人の伝統を見ると、私たちの信仰が豊かになり、これらの繋がりをより深く見ることができる。前に戻って新約聖書の中に意図されていることを考えてみる。

ヨハネ福音書の弟子という言葉を読むと、忠実な過去の物語だけを読んでいるのではない。私たち自身が弟子であること、そして未来も弟子であることの意味を考えさせている。聖書を前後に読み続け、今日はイエスを探すことから出発しよう。

先週の福音書で、群衆に食事が与えられたことを覚えているだろうか？ 十分に与えられ、パンの残り屑で12の籠が一杯になった。養われたすべての群衆はイエスを探すが、イエスはそこにおられない。それで彼らはイエスを求めて湖（ガリラヤ湖）を渡る。再び気付いてほしいのだが、この聖書の節は事実にもとづく真実ではない。詩のように芸術や象徴でたたえている節である。大切な部分は、まず最初に群衆がどのようにイエスを見失ったかではない。大切なことは群衆がイエスを探し求めることだ。群衆は探す折に、何をしたのだろうか？ 最初に水の上を渡る。私たちがイエスを探しているので、すべての印(symbol)に気付いてほしい。水の上を渡るとは何を教えているのか？

最初に—旧約聖書は象徴的である。モーセが人々を導くために、海水(water)を二つに分けた物語を覚えている。モーセが人々を奴隷から救い出し、解放したのを覚えている。この物語を新訳で読むなら、洗礼(水)を受けた私たちが救い出されたと覚えてほしい。救済される。命のよみがえりに招かれる。この世はどのように動かされるべきかと信じた過去から解放される。神の王国での命、神の王国の命に招かれている。

群衆は湖の向こう岸にたどり着く。彼らはモーセが導いた群衆とほぼ同じである。彼らは取り乱している。旧約聖書では向こう岸でモーセに従う群衆はついに自由となる。群衆は解放の岸辺にいる。自由があり神が臨在されている。暗い雲が一日中人々を覆ったので、（寒くなったので）神は一晩中火柱を立てられた。神の臨在の印として、人々は天からのパンであるマナを得る。しかし彼らは不満を漏らし不平を言う。天からのパンを与えられたが、彼らは肉を切望する。自由になった人々は、黄金の子牛を作り、その像を神の代わりとして崇拜する。知識としてであるが、ヘブライ語のマナという言葉は、文字どおりに意味／訳をするなら「それはなにであるか？」である。神の民は自由になり、自分を見失う。

本日の福音書で、イエスは従う群衆に「あなたがたがたが従うのは、パンのためだけです」と言われる。初代教会では、飢えた人々を養う確固たる行いがあった。ある人たちは無料の食事のためだけに来ていた。

ヨハネの福音書では、疑問を持ち、この質問を人生の前面に置くようにと常に誘っている。イエスは私たちが質問するようにと招かれておられる。

私たちがイエスを探す時、私たちは何を求めているのか？

私たちは満腹することを求めているのか？ パンで満たされた人生なのか、あるいは個人的な満足であるのか？ 確かに、これらのことは間違いではない。

(自己) 満足するのか、満腹するのか、あるいは両方か、いずれもそんなに悪くはない。そして、どのように個々が満腹にされたかの質問でなく、私たちがイエス、すなわち救いを探すことにつながる質問である。

ここで大切なことを明らかにする。私は満腹にされることについて話している。満腹。本当に飢えているこれらの人々、世界には多くのこれらの人々が存在する。本当に飢えているこれらの人々のために、神はすべてのパンくずを集める人々に寄り添われると、私は信じる。

ここで今日の福音書に戻ってみる。

イエスは説明される。『朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい』（ヨハネ6:27）とイエスは言われる。

そして再び、私たちは聖書の前後に読んでいる。

覚えているだろうか。モーセと人々の集団が砂漠にいる時、一人が一日で食べることが出来る以上のマナを集めた。そして人々は余ったものを集め貯蔵したが、腐ってしまった。

この聖書の箇所を現在に進めて読んでみる。現在の世界は富の不平等な分配があり、億万長者の間では宇宙競争に向かっている。その間、世界の他の人々は、新株コロナと戦い続けている。国連はすでに発表しているが、気候変動とコロナによって、2021年は世界飢餓の厳しい年になるだろう。今日、朽ちる食べ物に対して、永遠の命に至る食べ物のために働くとは何のことなのか？

その働きとは何であるのか？ そしてイエスは答えられる－「信じることである」。人々が『神の業を行うためには、何をしたらよいでしょうか』と言うと、イエスは答えられる『神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である』（ヨハネ6:28-29）。

聖餐の御卓は、今日はどこと繋がっているのか？ 御卓に行くためには、信じること。

この個所では、イエスは私たちが何を信じるのかを告げられていない。
この時は聖書でイエスが教えられたすべてを、前向きに読むようにと招かれている。
イエスが御国について教えられたすべてを記憶すること。イエスが教えられていることで
『義に飢え渴となりびといているすべての人は満たされる』(マタイ5:6)を記憶すること。
『あなたの隣人を愛せよ』(マルコ12:31)とイエスは教えられている。
『愛は哀れみである』(ルカ10:37)とイエスは教えられている。
パウロは「現在のこの世界で希望を捨てるな」と私たちに気づかせている。
パウロは言う『希望の源である神が、信仰によって得られるあらゆる喜びと平和で
あなたがたを満たして、聖霊の力によって希望に満ちあふれさせてくださるように』。
(ローマ15:13)

今日、イエスは私たちに信じることを求められる。
群衆がどこで、どんなしるしが与えられるかを求める今日の福音書に戻ろう。
彼らはマナ(パン)を望んでいると言う。しかしモーセの物語を記憶している。
後に戻ると、砂漠で群衆は天からマナを得たのだが、不平を言ったのを記憶している。
彼らはぶつぶつと不満を言った。反抗、罪、不信がなくなることはなかった。
砂漠では、本当にたくさんのしるしがあった。それでも人々は拒んでいた。

私たちはモーセの物語を知っているし、イエスに従った群衆のことも知っている。
イエスが人々を気づかせられると、群衆は悔い改める。人々は改め、人々は言う。
『主よ、いつもそのパンを私たちにください』(ヨハネ6:34)。
イエスは従う群衆に、神がモーセに言われた同じ言葉を言われる。
その言葉は、先週イエスが弟子たちに言われた同じ言葉である。
イエスは言う「わたしである。エゴ・エイミ(Ego Eimi)ーわたしである」。
「わたしは命のパンである」。前を読むと、イエスが教えられたすべてを思い出す。
さらに先を読むと、私たちは常に告白と悔い改めに招かれているのを思い出す。

今日、私たちは祭壇に進み出て、命のパンを拝領する。私たちの働きは信じることである。
あなたの信仰を祭壇で示す。そしてさらに、この引用句を前向きに読み、私たちの人生を
前向きに生きる。ここの、この御卓みつくえだけでイエスを探すのではない。
ここの、この祭壇で、ここの、命のパンと共に、イエスを探すのだ。
教会を出る時は命のパンで満腹にして、信仰の働きを示す。そして世界に出て行く。
私たちは前進し、世界の中でイエスを探し働きをするのだ。その世界は、正義に飢え、
隣人との友愛を切望し、慈悲に渴いている。そして希望を切望している。

(文責長澤猛)